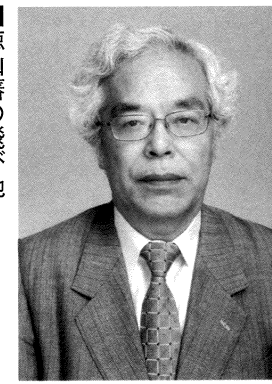
リレー随筆 ⑪

郷土の志士 池田梁蔵の生涯を追う

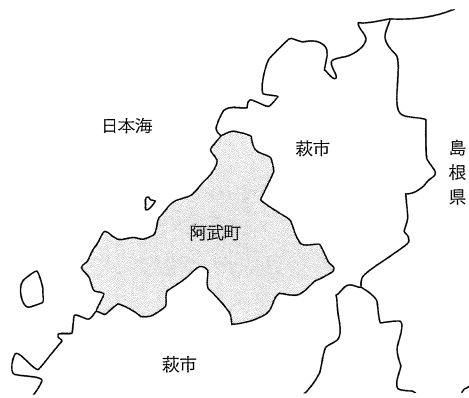
東京ふるさと阿武町会幹事長
三浦　孝夫氏


三浦　孝夫氏

■徳山藩の飛び地

私の故郷は山口県阿武郡阿武町大字奈古。日本海に面した北浦海岸に位置し、萩市の隣り町である。隣り町というのは正確ではないかもしれない。平成の大合併で周囲の町村はすべて萩市と合併したため、陸側の三方はいずれも萩市と接することになったからだ。萩市の側からみれば、広大な市域のなかに空白地が残った格好である。

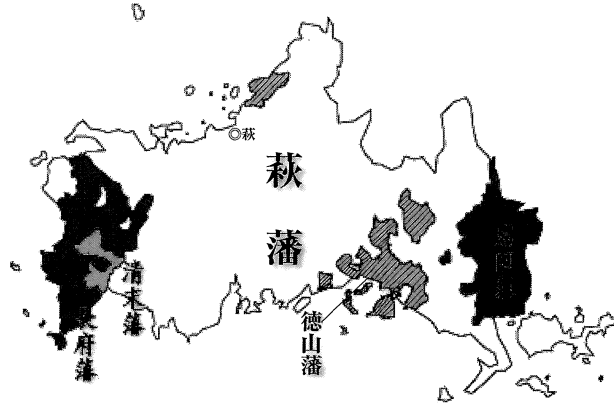
阿武町が萩市との合併を拒否したことについては批判の声が多い。平成の大合併は、少子高齢化が進む時代の要請でもあった。阿武町の選択はそうした世の趨勢に背を向けるものというわけだ。首都圏にいてもそうした批判の声は聞こえてくる。しかし、私はそれには与しない。五十年近くも故郷を離れている者が、そこに住んでいる人たちの決断についてとやかくいうことは僭越と思うからだ。私としては、単独行政の道を選択した阿武町に頑張れと声援を送るのみである。



阿武町の位置

昨年十一月、久しぶりに会った高校（山口県立萩高等学校）の同級生M君が「奈古がなぜ萩市と合併しなかったか、その理由がわかった」と言いながら近づいてきた。「奈古は徳山藩領だったんだね」―と。それを聞きながら私はひそかにほくそ笑んでいた。というのも、以前、東京のある会合で萩市との合併問題が話題になった時に、私が似たような説明をしたことを思い出したからだ。そう、奈古は江戸時代を通じて徳山藩領だったのだ。

関ヶ原の戦いに敗れた毛利輝元は防長二州に削封され、家督を長男の秀就に譲った。萩藩（長州藩）の始まりである。その一方で輝元は、可愛がっていた次男の就隆にも瀬戸内海側の都濃郡を中心に三万石余を与えた。天和三年（一六一七）のことだ。これが徳山藩の始まりである。就隆は与えられた所領に不満があったらしく、一部の知行替えを要求し、四年後の天和七年（一六二一）にそれが実現する。この時に、萩に近い奈古村と、奈古村と萩との間に位置する大井村のうち、大井川右岸の奈古寄りの地域（先大井と呼ばれる）が徳山藩に組み込まれたのである。徳山藩としては、宗藩の藩庁に近い場所に足がかりがほしかったのだと思われる。以来、奈古には徳山藩の出先である勘場が置かれ、徳山から役人（奈古大井下代）がやってきて統治した。周囲の村々はいずれも萩藩領で、奈古村（と先大井）はそれらに囲まれて徳山藩の飛び地として江戸時代を過ごしたのである。その在りようは周囲を萩市に囲まれた現在とよく似ている。同級生のM君は、奈古が徳山藩領であったことを知ってそのように思ったに違いないのだ。



萩藩と3支藩・支族（岩国藩）

しかし、徳山藩領であったことが、奈古（阿武町）が萩市との合併を拒否した理由だというと、いささか牽強付会に過ぎる。なぜなら、奈古が徳山藩領であったことを知る人は今や地元にはほとんどいないからだ。ただ、次のようなことは言えるだろう。徳山藩領時代、奈古の人は何かあると、隣の萩ではなくて、山を越えて山陽筋の徳山までお願いに行った。人々の意識は萩ではなく徳山に向いていたのだ。だから、周囲の村々に比べて、萩に対する思いにかなりの温度差があったと考えられるのだ。二百五十年近い徳山藩領

時代を通じて培われたこの意識は簡単に消えるものではない。平成の大合併に際して、この温度差が影響した可能性は確かにあるかもしれない。

■波乱万丈の生涯

徳山藩領時代の末期、すなわち幕末維新の激動の時代に、尊王攘夷運動に身を投じ、ロンドン渡航まで果たした人物が奈古にいた。その人の名は池田梁蔵である。畔頭（くろがしら＝庄屋に次ぐ地下役人）を務める有力農家の長男に生まれた梁蔵は、幼くして勉学に励み、須佐の育英館、後には京都で学び、尊王攘夷思想に共鳴、家督を弟に譲って国事に奔走した。

私が梁蔵の存在を知ったのは、平成八年に刊行された「阿武町史」によってである。近世後期の最後の節に、六ページにわたって池田梁蔵がとりあげられていた。池田家の菩提寺「大覚寺」に残る梁蔵の立派な墓の写真とともに、墓石に刻まれた銘文が採録されていて、梁蔵の生涯を知ることができた。読み終わった時の感動は言葉には尽くせない。久坂玄瑞や高杉晋作が京都や江戸で活躍していた時に、その運動の輪の中に梁蔵はいたのだ。蛤御門の変で長州藩が敗れた時には江戸にあって幕府に捕らわれ、一年八カ月にわたり捕囚生活を送った。解放（慶應二年六月）後も反長州感情の強い江戸に潜入して藩命を果たした。その働きが認められて、梁蔵は下士にとりたてられる。慶應四年一月のことだ。

その二カ月後、梁蔵はロンドン渡航を試みる。英国留学を許された徳山藩世子平六郎（後の元功）が兵庫で乗船した英国船に密かに乗り込んだのだ。しかし、長崎で発覚し、同行は許されなかった。梁蔵は上海で下船、ここで八カ月を過ごす。そして再びロンドンを目指し、明治二年初めにロンドンに到着、平六郎に再会する。梁蔵は平六郎の支援を得てその後、パリから欧州を遊歴して海路、喜望峰回りで翌明治三年一月、帰国する。ほぼ二年間を海外で過ごしたことになる。帰国直後に梁蔵は無断渡航を詫びて「差し控え」を申し出るが、藩主の元蕃（もとみつ）は処罰するどころか逆に英国渡航を賞して俸禄を加増し、梁蔵に東京藩邸勤務を命じた。奈古の地元でも梁蔵の昇進を祝う披露が行われた。（そのときに村民が持ち寄った酒、魚、お金などお祝いの控えが池田家に残されている）

しかし、舞台は暗転、その一カ月後の明治三年十一月六日、東京への赴任直前にして梁蔵は病没する。「阿武町史」は「攘夷から開国への激動のタイムトンネルを全力疾走して、惜しくも徳山で三十八歳の生涯を閉じた」と、波乱に満ちたその生涯を称えている。

奈古の大覚寺にある池田梁蔵の墓。「池田梁蔵橘克信墓」とある。

■「東京ふるさと阿武町会」で紹介

会社勤務に忙殺されて、梁蔵のことはその後長い間、頭の片隅に追いやられていたが、私は昨年、再び梁蔵と向き合うことになった。

一昨年、私は同郷の士とともに「東京ふるさと阿武町会」（会長は阿武町福賀出身で東京アートの創業者三木正市氏）を立ち上げた。その第二回大会（平成二十七年六月）を前にして、東京在住で阿武町ゆかりの人を招待したいと思った時、池田梁蔵のことが頭に浮かんだのだ。「阿武町史」において、池田家の子孫が町田市に住んでおられる様子だったので、調べてもらったところ、渋谷区に池田家第八代当主俊彌氏（故人）夫人、池田和子さんがご健在だったのである。自宅を訪ねると、梁蔵ゆかりの書籍類や手稿、手紙などが、大地主だったことをうかがわせる池田家の文書類とともに、大切に保存されていた。私はこれらを見せていただくと、その一部を「東京ふるさと阿武町会」の大会会場に展示したいと考え、了承いただいた。その上で、和子さんに大会への出席を要請したところ、代わりにお嬢さんが出席されることになった。大会会場の一角に「梁蔵文庫」コーナーを設け、梁蔵関係書籍類を展示するとともに、私が梁蔵の紹介をし、お嬢さんには池田家における梁蔵について話していただいた。

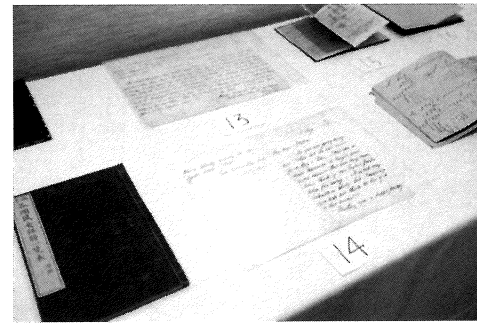
私の梁蔵研究はここからスタートしたのである。

東京ふるさと阿武町会での梁蔵文庫の展示

■「郷土の志士」の証

ここで、池田家に残されている梁蔵関係書籍類のうち、興味深いものをいくつか紹介しよう。

（1）「時義略論」写本＝「時義略論」は、井伊直弼が朝廷の許可を得ずに日米修


上の展示の一部。13番と14番はロンドンで世話になったH.H.ハリソン氏から梁蔵に宛てた手紙。14番の右隣りは滞英中の練習帳で、数学の計算式が書き連ねてある。

好通商条約に調印（安政五年〈一八五八〉六月十九日）して、尊王攘夷運動に火をつけたときに、吉田松陰が藩庁に提出した献策で、調印は違勅であり、違勅は大罪であると幕府を激しく批判している。誤字の訂正が二、三箇所あることから写本であることは明らかだったが、文末には安政戊午（安政五年）七月一六日の日付があるのみだったので、恥ずかしながら私は、これを誰が書いたのかすぐにはわからなかった。吉田松陰であることを知ったのはしばらくたってからだ。この写本を梁蔵が筆写したのかどうかは精査が必要だが、梁蔵が懸命に読んだであろうことは間違いない。そうでなければ、池田家に今日まで伝わるはずがないからだ。梁蔵が尊王攘夷運動に身を捧げた証である、と私は思っている。

（2）風事録＝坂下門外の変、大橋順蔵（吶庵）召捕、東禅寺事件、島津久光率兵上京と寺田屋事件など文久二年（一八六二）に起きた事件の概要・顛末・風聞などを書き記したもの。新聞がなかった時代、世の出来事は高札、回状、風聞などによって伝えられ、人々は必要に応じてそれらを帳面に書き留めた。近江商人で、尊王攘夷運動に挺身した西川吉輔が書き残した文書からの筆写もある。梁蔵が筆写したものとは現時点では断定できないが、文久二年当時、梁蔵が京都にいたことの傍証になる。歴史の教科書では決して教えられない当時のさまざまな風聞が書き留められていて大変興味深い。

（3）改正増補　英和対訳袖珍辞書＝幕末の開国で急速に高まった英語へのニーズに対応するため、文久二年（一八六二）、我が国初の本格的な英和辞典「英和対訳袖珍辞書」が刊行された。その再販二刷で、慶應三年（一八六七）に幕府の開成所が刊行した。初版本は二両二朱（当時、米が百五十キロ買えたという）という高額にもかかわらず二百部が数日で売り切れたという。再販一刷は慶應二年に一千部が刊行された。再販二刷は二〇〇六年に研究者が発表した論文によると、六十六本の現存が確認されている。うち一本は山口県立図書館にある。もちろん池田本は、この中には含まれていない。梁蔵が英国渡航を目指して兵庫で英国船に乗るのは慶應四年三月のことで、前年の秋、御用で江戸に行った時に買い求めたものだろうか。表紙の見返しに漢詩、裏表紙の見返しに和歌が書かれ、漢詩には梁蔵の号である青波の署名がある。序文の空白欄に「池田梁蔵」の名前がわずかに読み取れ、梁蔵の愛用であったことがうかがえる。

（4）一八六九年のロンドンとパリのガイドマップ＝梁蔵が訪れた両市のガイドマップで、当時の様子がよくわかる。ロンドンの地図には鉄道が何本も敷かれ、既に地下鉄（一八六三年運用開始）も走っている。劇場や博物館、美術館など観光スポットの案内や乗り合い馬車の路線図、運賃なども掲載されている。

■阿武町図書館で公開を

池田家で人知れず大切に保存されてきたこれらの梁蔵関係書籍類を、公的な施設に移して広く一般の人が見られるようにすることが、今の私の願いである。その場所にいちばんふさわしいのは、梁蔵が生まれ育った奈古（阿武町）であるはずだ。奈古においてこそ、その価値はいや増すと確信している。阿武町に図書館が整備され、その一角に梁蔵関係書籍類を収めた「梁蔵文庫」と梁蔵の生涯を紹介する展示を併設した「梁蔵コーナー」が設けられれば、これ以上の喜びはない。

その時に備えて、私は「梁蔵文庫」の目録づくりと、謎の多い梁蔵の生涯について調査研究を進めている。

梁蔵自筆の資料が限られている現状では、徳山藩をはじめ、当時、梁蔵と関係のあった人々が書き残したものの中に梁蔵の記録がないかと期待をかけている。梁蔵との関係が深かったと思われる人物のひとりが遠藤貞一郎だ。彼は医者の家に生まれながら梁蔵同様、家業を継がず、国事に奔走した熱血漢で、高杉晋作らの英国公使館焼き打ちにも加わっている。梁蔵とは蛤御門の変の際、江戸にいて、共に幕府につかまり新見藩邸で捕囚生活を送ったうえ、明治二年のロンドン渡航にも二人は同行したといわれている。帰国してから、大津郡長や赤間関区長を務めた。この遠藤貞一郎が江戸での捕囚生活やロンドン渡航について記録を残していないだろうか。ゆかりの方にお尋ねできればと思っている。

梁蔵の生涯で最大の謎は、妻帯の有無と死因である。現時点では、梁蔵は生涯独身で病死したことになっている。しかし、妻帯については、池田家に残された先祖の位牌の中に「寿作克信の妻」（安政六年五月十一日死亡）のものがあり、「寿作克信」は「梁蔵克信」すなわち梁蔵のことではないか、と思われるのだ。（克信は梁蔵の諱で、梁蔵は通称。通称はしばしば変わるからだ）もしそうだとすれば、梁蔵は結婚して妻に先立たれたことになる。死因については、病死とは別の話が池田家では語り継がれている。実際はどうだったのか、当時の資料に当たってみるしかない。

間もなく私は、四十三年に及ぶ会社勤務から完全リタイアする。大学入学のため、故郷奈古を離れてからは四十八年になる。余生を梁蔵研究に捧げるつもりである。

◇筆者プロフィール
三浦　孝夫氏
昭和二十五年阿武町生まれ。東京大学西洋史学科卒。株式会社海事プレス社・特別編集委員。埼玉県志木市在住。
※池田梁蔵に関する情報をお持ちの方は、防長倶楽部事務局（電話０３―３４４５―９１１１）までお寄せください。随筆についての感想も歓迎いたします。